
平凡日和

天月 統夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡日和

【Nコード】

N6477I

【作者名】

天月 統夜

【あらすじ】

平凡な日々を過ごす少年がいた。
その少年はとても孤独だった。
その少年は常に普通に生きてきた。
その少年は常に寡黙だった。
その少年は常に無情で生きてきた。
その少年はそれが一番だと思ってきた。
その少年はそれが正しいと思っていた。

その少年を救う為に、一人の少年が立ち向かう。
その少年は変わる為に、一人の少年と立ち向かう。
運命という、過酷な宿命に。

プロローグ

僕は平凡だった。

平凡な高校に通う、平凡な学生。

僕はそれで満足していた。

普通が一番。

普通なのが幸せ。

適当に生きて、適当に死ぬ。

それが平凡だと思っていた。

それが正しいと思っていた。

そんな、僕を…彼は変えようとしてくれた。

第一凡 勇氣出せ

5月6日、水曜日。

朝7時起床、顔を洗い、朝ごはんを食べる。

それから着替え、7時40分、家を出る。

僕は、今年はれて高校生になった。

中学生のころから、親と先生以外に話したことはなかった。

故に高校生活も未だ馴染めなかつたが、登校するのはしていた。

普通だった。

僕は何もかもが平凡だった。

勉強もスポーツも並だった。

今まで16年間、ずっと普通に過ごしてきた。

何で誰とも関わろうともしないの？

両親は口癖のように言っていた。

僕はいつもこう返していた。

関わって何かがある？人はどうせすぐに裏切る。

下らない関係を持つ必要がない、他人を気遣うだけ疲れる。

これが僕の口癖と言っても過言ではなかった。

僕は自分以外の人を信用することがどうしてもできなかつた。

∴僕は平凡だ。

でも、どこかで自分を特別視しているのかもしれない。

僕には他人と違う何かがある。

一般人と関わる必要なんてない。

そう思つて生きてきたところも少しはある。
他人には無情、自身には甘えていたのかもしれない。

中学の先生…3年生の時の担任に言われたことがある。
誰とも関わらずして、孤独で寂しく生きようとも本当に何も思わな
いのか？

僕はその時、言葉を返せなかった。
その時に何を考えていたかは定かではない。
今でもその言葉に、返答はしかねる。

僕は少年すぎるのだろう。
心が、まだ大人に成長できないのだろう。
だから、誰とも関わらずひっそりと生きようとするのだろう。
普通でいい、分相応な夢を見る、そう思うのだろう。
でも、それでも普通が…今の自分が正しいとも思えた。
だからその事については、深く考えないようにしていた。
…いや、僕はその事から逃れるようにしていた。

8時30分に学校についた。
学校には徒歩で通っている、いつもこの時間帯についた。
8時40分から朝の学活がスタートするのであった。

僕は休み時間、ずっと自分の席についていた。
その事を自身、何とも思っていないかった、僕には普通だった。

9時から授業が始まるのであった。
僕は勉強が嫌いだった。

…僕の席は一番左前だった。

一応、寝ることはしなかった。

授業は、プリントやノートをとるだけで先生の話はきいていなかった。

それだけでいいだろう、それが普通だろう。

12時から昼食の時間だった。

僕は、購買部にパンを買いにいった。

購買部は人気で、いつも混んでいた。

いつも普通に並んでいた。

時々、抜かされることもあった。

しかし僕は何も言わなかった。

抜かす人は大概が不良みたいなものだったからだ。

暴力をふるわれることが怖くて、なにも言えなかったといってもいい。

今日は、誰にも抜かされぬまま、後8人程で僕の番になるというところだった。

僕は、後8人：7人と期待して心の中で数えていた。

そんな時、誰かに後ろにまわされた。

隣のクラスの、少し有名な悪^{ワル}だった。

武藤 妖一^{むつう よういち}という名前で、髪は金髪でピアスをしていた。

親は有名政治家で、先生も迂闊^{うかつ}に手を出せなかった。

僕は勿論、何も言えなかった。

そんな時、誰かが待てよと言った。

「お前、さっきから何抜かしてんだよ」

確かにそいつはそう言った。

そいつは、藤原 達也^{ふじわら たつや}という僕と同じクラスの明るい子だった。

髪は少し茶色が混じった黒色、見た目は真面目で優しそうだが、睨むような目をする時は少し恐怖を覚える顔でもあった。

「何だよてめえ、文句あんのかよ」

武藤は反論してきた、当たり前といえはこいつには当たり前なのかもしれない。

僕は武藤と藤原に囲まれたようで、少し怖かった。

「大アリだつーの、その年で抜かすとか幼稚か、オムツはいとけよお坊ちゃん」

武藤はその言葉で完全にキレたようだった。

「てめえ……！ふざけんじゃねえ！」

武藤がそう言った瞬間だった。

先生が何をしていると云ったおかげで、大事に至らなかった。

僕は結局、パンを買えなかった。

「おい、お前さつき何で何も言わなかったんだよ」

藤原が、昼後の休み時間に僕に話しかけてきた。

僕は何も答えなかった、ずっと寡黙かまくなのが僕の性分だ。

「なーんーとかー言ーえーよー？まさか、抜かされて何も思わねえのか？」

僕はそれでも何も言わなかった。

生徒でここまで僕に話しかけてきた人は藤原が初めてだった。

「……お前、名前何て言うんだよ」

藤原は少しため息をつきながらそう言った。

「……天宮……勇氣」

僕は思わず答えてしまった。

答えてから、気付いたんだ、自分が言葉を発したことに。

「勇氣かよ、良い名前じゃねーか、嫌な事はハッキリ嫌って言うおうぜー？」

藤原は気軽に、茶化すようにそう言った。

「……僕、殴られたりしたら……嫌だから」

なぜか藤原にはすんなりと言葉が出てしまう。

自分で意識しないうちにだ。

「バーカ、殴られたら殴られたでだ、やってもねーのにそんな事言うなって」

「でも…」

その時、藤原は遮るかざるように言った。

「あんな、何事もチャレンジしてからなんだぜ！」

「1 やつてダメなら10 やれ、10 やつてダメなら100 やれ、これ俺の好きな言葉なんだ」

「勇氣は、一度もやってねーじゃねーかー？もし今度あんな事があったら、勇氣出して言ってみるよ、いざとなったら俺が助けてやるしやー！」

この言葉に、僕は洗い流されるような気分だった。

構ってくれることだけでも、嬉しかったのにこんな言葉をかけてくれるなんて思いもしなかった。

そこでチャイムが鳴った。

「おー、んじゃ、また今度話そうぜ？じゃな！」

藤原はそう言って、一番後ろの席についた。

その日の帰り道のことだった。

いつも通り道端を歩いて帰っていたら、50mほど前方では武藤とその友達が金属バットを持って立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6477i/>

平凡日和

2010年10月11日09時06分発行